

〔「書の美術展」によせて〕

絵因果経の中世作品一大和文華館本と個人蔵本一

絵因果経は釈迦の前世における事績と、生まれてから涅槃に至る現世での事績との因果について説いた『過去現在因果経』に基づき、経文とともに経意を表す絵を描いた八巻にわたる絵巻物です。上品蓮台寺本、醍醐寺報恩院本、東京芸術大学本、出光美術館本などの奈良時代に制作された遺品が知られ、書風や正倉院文書の記録から、唐本を手本に写経所で書写されたと推定されています。ただ、醍醐寺報恩院本と出光美術館本は同じ第五巻であるものの、画風や書風が異なることから、複数のセットがあったことが推測されています。

何れの作例も上下二段に分けられた画面に、古拙な味わいのある物語絵が連続し、濃厚で発色の良い彩色から、用いられた顔料や料紙の質の良さが伝わります。絵因果経には、これら奈良時代に制作されたいわゆる古絵因果経のほか、平安時代末期から鎌倉時代に制作された新絵因果経と呼ばれる一連の作例が現存します。白描画の遺品である聖徳寺本、建長6年(1254)の年紀と住吉慶忍および息子の聖衆丸の名前が絵師として奥書に記される根津美術館本、大東急記念文庫本をはじめ、いくつかの断簡が伝わります。当館には松永家旧蔵本と見られる断簡が所蔵されます(図1)。絵因果経第五巻の前半に当たり、太子が阿羅邏仙人、迦蘭仙人と会うために摩竭陀国の王舎城を出た後、面会に訪れた頻比婆羅

王と別れる場面です。一方、展覧会には高野山慈尊院内の勝利寺に伝来した勝利寺本の断簡が出陳されます(図2)。勝利寺本は松永家本と同じく第五巻で、出陳作品は後半部分に当たります。瞑想する太子に魔王が様々な妨害を仕掛ける、その冒頭部分です。

両者ともに古絵因果経では、出光美術館本と醍醐寺報恩院本(図3)に同じ場面が見出せます。人物の向きや配置、鬼の持物には共通点が見られ、基本的な図像は踏襲されていることが窺えます。しかし、表現に着目すると奈良・鎌倉という時代の差が如実に表れています。例えば描線では、古絵因果経の筆運びはゆっくりとして抑制された細線が多用されるのに対し、新絵因果経では運筆に勢いを感じられ、太さも均一ではなく、筆の打ち込みや払いの痕跡が明確な描線です。また、樹木や岩、山といった背景描写は、平板で古拙な前者に対し、立体感の表出を意図した岩肌表現や輪郭を強調した樹木の表現に違いが認められます。つまり、新絵因果経は古絵因果経特有の画趣の元で制作されたことが分かります。

また、新絵因果経には、登場人物たちのぎこちなさを感じさせる動きの硬い表現が全体に見られます。これは古絵因果経にも認められますが、一つ一つのモチーフを貼り付けたような描写は新絵因果経により

強く感じられ、本質的には全く異なるものです。同様のぎこちなさは「十二因縁絵巻」(根津美術館蔵)に認められます。次々と羅刹を改心させていく折吒王の姿は硬く単調で、平板な印象を与えます(図4)。さらに、岩や山、樹木を背景にモチーフを小さく配していく描き方は「法華経絵巻」(図5・香雪美術館他蔵)に見られます。何れも経典説話絵巻である点は注目されます。これらの作例に用いられた、運筆の勢いを感じさせ、起筆の打ち込みや払いの痕跡を明瞭に残す描線は、密教図像に見られる描線を想起させます。

院政期には院や天皇、貴族が図像に高い関心を示しました。図像の担い手である画僧や絵師は自ずと、彼らの美意識に応じた観賞性の高い図像を描くようになります。すなわち、絵師や画僧と宮廷絵師との間に技術的な差異が見られなくなっていくのです。このことが、宮廷絵師たちの間に、彼らにみに許される表現の探求、宮廷の美意識の体現者としての自負が芽生えたことが想像されます。こうした自覚が、鎌倉時代後半に描かれた「隆房卿艶詞絵」(国立歴史民俗博物館蔵)や「春日権現験記絵」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)の表現に結実しました。両者に見られる統制され、抑制された一つの描線は、まさに平安貴族によって生み出され継承された描線です。また、画題やモチーフによる描線の選択が意識的に行われたことも推測されます。鎌倉時代の歌仙絵や物語絵では描線の太さ、打ち込みや払いの痕跡、墨継ぎ、これらの有無や程度によって描き分けが行われていることが指摘出来ます。

新絵因果経に話を戻しますと、先行研究では、松永家本は13世紀末頃、勝利寺本は14世紀初頭に位置づけられています(田中一松「中世に

おける絵因果経の諸作品」『絵因果経<日本絵巻物全集16>』角川書店、1969年)。「十二因縁絵巻」や「法華経絵巻」と類似する要素が認められる新絵因果経は、経典説話絵巻の表現の「型」が確立し、継承されていったことを物語ります。鎌倉時代に描かれた絵巻作例の描線の差異に着目することで、表現の「型」を整理することが出来、それらを手がかりに描き手の問題にも迫ることが可能になると考えます。すなわち、新絵因果経の描線は宮廷絵師のものではないのです。断簡ではありますが今回出陳される二点の作例は、鎌倉絵巻を読み解く一つの手がかりを与えてくれます。

(古川攝一)

※図3は『絵因果経<日本絵巻物全集16>』角川書店、1969年、図4は特別展『清雅なる仏画』図録、大和文華館、2012年、図5は小松茂美編『阿字義 華嚴五十五所絵巻法華経絵巻<続日本絵巻大成10>』中央公論社、1984年より複写致しました。



図4

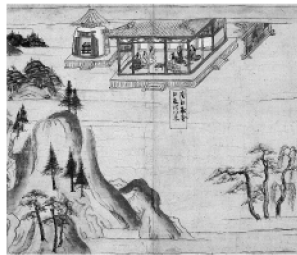


図5



図1



図2



図3

季刊 美のたより No.200

平成29年 9月 30日

発行 大和文華館